

音楽科の授業づくりにおける特別支援学校と大学の共同実践 — 特別支援学校児童と大学生による合同演奏の発表に向けた取り組み —

藤原志帆^{*1}・菅原久美子^{*2}・藤森智美^{*2}・深浦知恵^{*2}

Collaboration between Special Needs Schools and Universities
for Designing the Class Structure of Music Courses
— An Initiative toward Joint Presentations
by Special Needs School Students and University Students —

Shiho FUJIHARA, Kumiko SUGAHARA, Tomomi FUJIMORI and Chie FUKAURA

はじめに

熊本大学教育学部特別支援教育学科藤原研究室では、数年前から、熊本県立荒尾支援学校に「特別支援学校における音楽科指導に関する研究」にご協力いただいている。この研究に関わり、2015年から、小学部一般学級の先生方と音楽科の授業づくりを行う機会をいただいた。

本稿では、平成27年度に行った、音楽科の授業づくりにおける荒尾支援学校小学部一般学級と藤原研究室の共同実践について、取り組みの概容と成果、今後の課題について報告する。

なお、本稿は分担執筆である。「2. 特別支援学校からの報告」を菅原先生、藤森先生、深浦先生が担当し、その他を藤原が担当した。

1. 取り組みの概容

2015年7月、荒尾支援学校小学部主事の菅原先生と音楽科の授業に関するお話の機会をいただき、8月に小学部一般学級の先生方との授業づくりがスタートした。小学部一般学級では、7月に「演奏会をしよう」という題材の音楽科授業を終え、12月の発表会に向けた授業を検討されているところであった。

その後9月に、中山校長先生（2015年当時）から、小学部の発表会とスクールコンサートの日程を重ね、小学部一般学級の児童と大学生による合同演奏を発表してはどうかというご提案をいただいた。荒尾支援学校では12月にスクールコンサートが計画されて

おり、2014年は藤原研究室がコンサートを担当したところであった。

以上のような経緯で、音楽科の授業づくりは、児童と大学生による合同演奏の発表をめざして、表1のように進められることになった。

表1 音楽科授業づくりの流れ

実施日	内容	場所
8/24	授業づくりの打ち合わせ	熊本大学
9/16	授業の計画、合同演奏の構想	荒尾支援学校
10/13	合同演奏・合同練習の検討	熊本大学
11/26	授業参観、合同練習打ち合わせ	荒尾支援学校
12/1	合同練習	熊本大学
12/17	スクールコンサート	荒尾支援学校
3/23	授業づくりの振り返り	荒尾支援学校

1) 授業づくりの打ち合わせ

8月24日、熊本大学において、音楽科の授業づくりの打ち合わせを行った。小学部主事の菅原先生、音楽担当の藤森先生と深浦先生から、音楽科授業の計画と7月に行った演奏会での課題を伺った。開発中の「特別支援学校（知的障害教育）音楽科指導内容指標案（藤原・福島，2015）」¹⁾を参考にしながら、課題解決に向けた意見交換を行った。

2) 授業の計画、合同演奏の構想

9月16日、荒尾支援学校において、先生方と藤原で音楽科授業の計画について検討し、小学部一般学級の児童と研究室の学生による合同演奏の構成を考えた。学生の授業と移動の関係で合同練習の機会を複数回設定することが難しいため、器楽については、パートごとの演奏を合わせていく合奏形態をとることが決まった。

*1 熊本大学教育学部特別支援教育学科

*2 熊本県立荒尾支援学校

3) 合同演奏・合同練習の検討

10月13日、熊本大学において、音楽担当の先生方と藤原で合同演奏の方法と合同練習の設定について検討した。

合同演奏の曲目は、荒尾支援学校での検討の結果、「ドレミのうた」と「にじ」の2曲に決まった。「ドレミのうた」では、実態別に3グループ（「身体表現」「打楽器」「ベル」）に分かれた児童の演奏に学生が加わり、「にじ」では、児童と学生が身体表現をしながら歌うことになった。

先生方に担当児童の指導目標や指導内容を設定していただくための「指導内容指標案」と「指標使用前アンケート」をお渡しした。また、研究室の楽器の中から卓上ベルをお使いいただくことになった。

その後も、荒尾支援学校での授業の経過を踏まえながら、共に合同演奏の方法について検討を重ねた。11月中旬には、荒尾支援学校から「にじ」の振り付け動画が届き、大学からは「ドレミのうた」の伴奏音源を送った。

4) 授業参観、合同練習の打ち合わせ

11月26日、研究室の学生代表1名と藤原が、荒尾支援学校において小学部の音楽の授業を参観し、児童の演奏の様子を把握した。学生が作成したビデオレターを持参し、授業でも児童に学生が紹介された。

授業参観後、先生方と合同練習の打ち合わせを行った。

5) 合同練習

12月1日、熊本大学くすのき会館において1時間の合同練習を行った。荒尾支援学校からは、小学部一般学級の児童24名、中山校長先生（2015年当時）と小学部一般学級の先生方15名、大学からは研究室の学生11名、藤原が参加した。練習後、1時間の昼食交流を行い、先生方と代表学生、藤原でコンサートの打ち合わせも行った。

その後も、共に音響や舞台設定などの検討を重ね、コンサート本番に備えた。

6) スクールコンサート

12月17日、荒尾支援学校の体育館にて、表2に示すように1時間のスクールコンサートが行われた。荒尾支援学校からは、児童生徒135名、先生方77名、保護者の方60名、大学からは、学部生11名、専攻科生1名、大学院生2名、特別支援教育学科の大杉先生、藤原が参加した。

学部生の音楽劇、荒尾支援学校小学部一般学級児童と学部生の合同演奏、中学部一般学級の演奏が発表され、最後に、大杉先生、藤原の授業の中で専攻科生と大学院生が考えた、全員参加の音楽活動を行った。中山校長先生や堀川教頭先生（2015年当時）

にもサンタに扮して登場いただき（写真1）、楽しくコンサートを終えた。

表2 スクールコンサートの演目

演目	発表者
「ディズニーメドレー」(音楽劇)	熊本大学学部生 6名
「ドレミのうた」(合奏・身体表現) 「にじ」(合唱)	荒尾支援学校小学部 一般学級児童 24名、 熊本大学学部生 11名
「風になりたい」(合奏) 「ビリーブ」(合唱)	荒尾支援学校中学部 一般学級生徒 28名、 熊本大学学部生 1名
「クリスマスKAGURA」 「ニンニンジャー」 (全員参加の音楽活動)	(企画) 熊本大学 専攻科生・大学院生 3名



写真1 クリスマスKAGURAの音楽活動

*KAGURAは、カメラのついたPCの前で自由に体を動かすだけで演奏できる楽器アプリを用いた音楽活動。

小学部一般学級の児童と学生による合同演奏は、以下のような構成で行われた。

「ドレミのうた」

1番：歌詞「ドはドーナツのド…」

児童（ベルグループ）の演奏+学生の歌・ピアノ

2番：1番と同様の歌詞

児童（ベルグループ・打楽器グループ）の演奏+学生の歌・ピアノ

3番：1番と同様の歌詞

児童（ベルグループ・打楽器グループ・身体表現グループ）の演奏+学生の歌・ピアノ

4番：歌詞「どんなときでも…」

学生の演奏（クワイヤーホーン、フルート、身体表現、歌、ピアノ）

5番：歌詞「ドレミファソラシ…」

児童と学生の演奏

「にじ」

1・2番：児童と学生の歌・身体表現

7) 授業づくりの振り返り

2016年3月23日、荒尾支援学校にて、小学部一般学級の先生方と藤原で授業づくりの振り返りを行った。

藤原が示した「指標使用前・後アンケート」の分析結果をもとに、児童個々の変化や支援方法について先生方の見解を伺った。また、合同演奏、スクールコンサート後の学生アンケート結果についても紹介した。先生方から、今後の授業づくりの計画を伺い、意見交換を行った。

2. 特別支援学校からの報告

1) 小学部一般学級の概要

①学部紹介

県北荒尾市に位置する知的障がい支援学校で、平成28年度7月現在小学部34名、中学部37名、高等部69名、計140名が在籍する。各学部に一般学級と重複学級があり、教育課程は異なる。小一般学級児童は27名であり、「できる喜びを積み重ね、元気、笑顔、やる気いっぱいの子どもの育成」を小一般の目標として日々の授業に一生懸命取り組んでいる。

ここに登場する児童は、27年度時、1年生から6年生まで24名である。

②平成26年度の教育課程と教科音楽の取り組み

平成25年度まで、音楽に関する内容は各教科等を合わせた指導の中で扱っていたが、平成26年度から教科「音楽」を「図画工作」と併せて週1時間位置づけた。平成26年度の時間割を表3に示している。

表3 26年度週時間割

	月	火	水	木	金
午前	朝の活動(日生、国語、算数)				
	朝の運動(体育)				
	生活単元学習				音楽/図工
午後	屋食準備、屋食、屋休み(日生)				
	帰りの活動	そうじ(日生)			
		国語・算数			学級活動
	帰りの活動(日生)				

音楽の授業は、季節の歌「こいのぼり」「たなばた」「うみ」「たきび」「お正月」「ゆき」「ひなまつり」等の歌を取り上げた。また、身近な楽器ということで、楽器当てクイズなどクイズ形式も取り入れながら、タンバリン、カステネット、すず、マラカスなどに触れ、簡単なメロディーに合わせて演奏した。

鑑賞として、地域のギター愛好会や大正琴のサークルの方々を招いて聞き、触れる時間も設定した。

楽器の不足を反省し、年度末には木琴や鉄琴の購入、太鼓類の整理などを行った。

③平成27年度の教育課程

26年度の取り組みを次の視点から見直し、27年度は週2時間の位置づけにした。

- ・音楽に対する子どもの興味・関心が高く、図画工作との関連から週2時間は設定したい。
- ・指導要領に基づいた目標、内容を明確にし、年間計画を立てる。
- ・発表会という形で目標を設定し、見通しを持って取り組むことができる。発表後は達成感や成就感を得ることができる。
- ・保護者に成果を披露し、自己評価のみならず、他者評価も得られる。

週時間割を、表4に示すように見直した。

表4 27年度週時間割

	月	火	水	木	金
午前	朝の活動(日生)				
	朝の運動(体育)				
	国語 算数 自立活動	音楽 図工 体育	国語 算数 自立活動	音楽 図工 体育	国語 算数 自立活動
午後	屋食準備、屋食、屋休み(日生)				
	帰りの活動	そうじ(日生)			
		生活単元学習			学級活動
	帰りの活動(日生)				

2) 音楽科授業の取り組み

①授業の実際1

7月1日のハートフルシンポジウムでの公開授業に向け、題材「演奏会をしよう」に取り組んだ。題材の目標を、

- ・友達や教師と一緒に合唱を楽しむことができる。(かかわる)
- ・演奏会に向けて期待感をもって活動することができる。(きめる)
- ・自分の役割を理解し合奏に取り組むことができる。(はたらく)

の3つに設定し²⁾、表5に示す日程で取り組んだ。

この題材においては、音楽担当の教師が授業内容を考えて提案する、というかたちで計画した。演目は表6の通りである。

歌唱については、季節にちなんだ歌唱曲として、児童の実態と著作本掲載曲であるということから選

曲した。器楽については、各担任が学習指導要領の段階を参考にしながら、全児童を2つのグループに分けた。その後各グループの担当になった教師が、児童の実態に合った合奏曲を選んだ。

表5 「演奏会をしよう」授業日程

実施日	内容
6/9	導入、歌唱練習①
6/11	歌唱練習②、器楽グループ練習①
6/16	歌唱練習③、器楽グループ練習②
6/18	歌唱練習④、器楽グループ練習③
6/23	歌唱練習⑤、器楽グループ練習④
6/25	歌唱練習⑥、器楽グループ練習⑤
6/29	予行練習①
6/30	予行練習②
7/1	演奏会

表6 「演奏会をしよう」演目

発表形態	内容	演目	使用楽器
全体	歌唱	「あめふり」	
グループ別	器楽	「さんぼ」	打楽器(マラカス、小太鼓、タンバリン、鈴など)
		「きらきらぼし」	トーンチャイム、グロッケン、トライアングル



写真2 歌唱「あめふり」の発表



写真3 器楽「さんぼ」の発表



写真4 器楽「きらきらぼし」の発表

演奏会後の児童の評価は以下の通りである。

- ・リズムに合わせて自分でタンバリンを叩くことができた。
- ・色楽譜を見ながら自分でトライアングルを演奏できた。
- ・歌に合わせて声を出したり、教師や友達と手を繋いだり、踊ったりして楽しむことができた。
- ・音楽に合わせて自ら体を揺らして音楽を楽しむことができた。
- ・テレビ画面に映し出される自分の顔写真に合わせて、タイミングよくトーンチャイムを鳴らすことができた。

一方、授業づくりにおける教師のアンケートから以下のような課題が出た。

- ・学習指導要領の段階は捉え方の幅が広く、児童一人一人の実態からグルーピングする際には使いにくい。
- ・児童の実態に合った楽器の選定が難しい。
- ・言葉に出して歌うことが難しい児童への歌唱の指導をどうすればよいか。
- ・音楽に合わせた身体表現の指導・支援をどうしたらよいか。

このような課題を踏まえ、熊本大学の藤原先生より授業づくりについての助言をいただくことになった。

②授業の実際2

12月17日のスクールコンサートに向け、題材「スクールコンサートで発表しよう」に取り組んだ。

○当日に向けた授業づくりミーティング

本校では、児童の教育的ニーズに応じた授業づくりを行うために、KJ法を用い、話し合いながら授業の内容や構成を考えていくことが多い。今回も、前題材「演奏会をしよう」の課題点や改善点などを元にKJ法を用いて、意見を出し合い、内容や構成を検

討していった。同時に、グルーピングの方法など、授業づくりを行う上での疑問や質問事項をまとめ、それらの資料を持参し、熊本大学にて、藤原先生と打ち合わせを行った。

打ち合わせの中で、発表内容を「器楽」と「歌唱」にすること、「器楽」の発表は、学生と一緒に演奏することが決定した。器楽については、著作本掲載曲であること、児童にとって馴染みがある、そして、リズムがとりやすいことを理由に「ドレミのうた」を選曲した。また、歌唱については、児童にとって馴染みがあり、曲のテンポがゆっくりで、尚且つ、児童が歌いやすく、身体表現もしやすいことを理由に「にじ」を選曲した。

○題材の目標

題材の目標を、次の4つに設定した。

- ・音楽に合わせて体を動かして楽しむ。(かかわる)
- ・打楽器を使って簡単なリズムを刻んだり、音楽に合わせて旋律楽器を演奏したりする。(はたらく)
- ・音楽に合わせて歌ったり、身体表現をしたりして楽しむ。(かかわる)
- ・学生とのかかわりを楽しみながら表現活動を行う。(かかわる)

○活動内容

器楽・身体表現「ドレミのうた」では、「特別支援学校(知的障害教育)音楽科指導内容指標案第2版(藤原・福島, 2015)」を用いて、グルーピングを行った。グルーピングは表7の通りである。

表7 「スクールコンサートで発表をしよう」器楽・身体表現グループ

グループ名	内容	使用教材	指導要領との関連
のりのりグループ	身体表現	振り付け動画	内容「身体表現」1～2段階
たんたんグループ	打楽器や鈴、タンバリンなどのリズム打ち	音を鳴らすタイミングに合わせて楽器の写真を提示するスライド	内容「器楽」1～2段階
りんりんグループ	卓上ベル(有音程)	・音階ごとに色分けした色楽譜 ・音階をひらがなで表した楽譜 ・音階をひらがなで表し、めくり式にした楽譜	内容「器楽」2～3段階

のりのりグループは、自分で楽器を鳴らすことは難しいが音楽に合わせて体を動かすことができる児童が、教師と一緒に手を繋ぎ、体を横に揺らしたり、ジャンプしたりして体で音楽を表現するグループである。たんたんグループは、音程を理解することは難しいが、打楽器を鳴らすことが得意な児童が、音楽に合わせて簡単なリズムで打楽器を鳴らすグループである。りんりんグループは、音程の違いが分かり、合図に合わせて楽器を鳴らすことができる児童が、自分の担当する音階の卓上ベルを音楽に合わせて鳴らすグループである。前題材「演奏会をしよう」の反省より、トーンチャイムのように、楽器を鳴らすタイミングと音が鳴るタイミングが異なる楽器の使用が難しかったため、今回有音程の楽器として卓上ベルを用いた。

歌唱「にじ」では、前題材「演奏会をしよう」の反省より、身体表現を取り入れた。児童が主体的に身体表現活動に取り組むことができるように、これまでの身体表現活動で用いてきた動作を生かして、簡単な振り付けをつけた。

○実際の授業の様子

・校内での授業

授業は表8の日程で取り組んだ。

表8 「スクールコンサートで発表をしよう」学習指導計画

実施日	器楽・身体表現	歌唱
11/10	導入(鑑賞、歌唱)	
11/12	グループ練習①	全体練習①
11/17	グループ練習②	全体練習②
11/26	グループ練習③ 全体練習①	全体練習③
12/1	熊本大学での合同練習	
12/8	グループ練習④	全体練習④
12/10	グループ練習⑤	全体練習⑤
12/15	予行練習①	
12/16	予行練習②	
12/17	スクールコンサート本番	

器楽・身体表現については、グループ練習を取り入れ、練習の内容や支援方法は、各グループの担当教師が行った。歌唱については、児童が身体表現をしやすいように、教師が見本として前に立ち練習を行った。また、「にじ」の振り付け動画を各クラスに配布し、朝の会の歌などでも歌えるようにした。

・熊本大学での合同練習

事前に学生から頂いていた自己紹介動画を鑑賞し、通学バスで熊本大学に向かった。児童は、初めて見

る大学に大興奮だった。器楽・身体表現の練習では、初めて「ドレミのうた」の学生の生伴奏に合わせて演奏を行い、音の速さや大きさの調整を行った。歌唱の練習では、学生が提案した間奏の振り付け（ウェーブ）を練習した。学生が主となって進行し、児童の実態に合わせて合図の出し方や振り付けを検討した。簡単で分かりやすい振り付けであるため、児童は両手を上げてウェーブを作るのを今か今かと待っていた。その後、学生は、児童と一緒に歌う学生、ハモる学生に分かれ、2回ほど通し練習を行った。児童にとって、初めてのハモりだったが、学生の声量が適度であり、児童は気持ちよく歌を歌い、そして、音楽を体で楽しんだ。練習後は、学生を交えて昼食を取ったり、学生が児童と手遊びをしたり、会話をしたりと交流を深めることができた。



写真5 歌唱「にじ」の合同練習

・スクールコンサート当日

スクールコンサートが始まる前に、藤原先生、学生、音楽担当の藤森が体育館にて最終打ち合わせを行った。スクールコンサートでは、全校児童生徒や保護者など大勢の前で発表を行った。少し緊張をしている児童もいたが、一人一人が自分の持っている力を十分に発揮することができた。器楽「ドレミのうた」では、ステージで演奏をしている学生を見るために、体を斜めに向けてステージを見つめている児童がいた。また、自分のパート以外になると楽器を置き、他のパートの演奏をしっかりと鑑賞する児童もいた。歌唱「にじ」では、普段あまり大きな声で歌うことが少ない児童が、広い会場内でも歌声が聞こえるくらい大きな声で歌うことができた。また、学生と一緒に身体表現を楽しむ児童もいた。会場からも、児童の振り付けを真似て、一緒に体を動かしたり、口ずさんだりする生徒や保護者の姿が見られ、会場が温かな雰囲気包まれた。発表終了後には、「すごくいい発表だった。」と言う声を頂くことがで

きた。児童も達成感や成就感に満ち溢れた表情をしていた。



写真6 器楽・身体表現「ドレミのうた」の発表
*りりんグループ（卓上ベル）



写真7 器楽・身体表現「ドレミのうた」の発表
*手前、のりのりグループ（身体表現）、
奥、たんたんグループ（打楽器）



写真8 歌唱「にじ」の発表

・振り返り

後日、スクールコンサートで撮影した動画を鑑賞した後、頑張ったことや楽しかったことを発表した。スクールコンサート後の児童の評価は以下の通りである。

- ・「にじ」では、サビの部分になると大きく体を揺らすことができた。
- ・「ラララ」などの発音しやすい歌詞は、大きな声で歌う姿が見られた。
- ・卓上ベルを担当し楽譜を見ながら、自分でタイミングを合わせて演奏することができた。
- ・身体表現グループになり、教師の見本を覚え、言葉掛けでタイミングを合わせながら、笑顔で体を動かし発表することができた。

3) 取り組みの成果と課題

①成果

これまでの教育課程の見直しから、教科「音楽」の必要性を大きく取り上げ、週2時間の取り扱いでスタートした27年度であった。音楽の免許を有する教師がいない状況の中で、音楽担当藤森、深浦を中心に担任全員で試行錯誤しながら授業作りにあたった。この中であって、熊大藤原先生との出会いはたいへん意義深く、今後の音楽教育に光明を見出すことができた。ご指導のおかげで、スクールコンサートが成功し、多くの人からお褒めの言葉をいただいた。歌や演奏が楽しかった、もっと歌いたい、もっとたくさんの歌を覚えたい、もっと演奏したい、いろいろな楽器に触れたいというのが子どもたちの素直な気持ちであろう。音楽の楽しさをしっかり感じ取っている。学生とのふれあい、交流がさらに音楽の楽しさを深めた。指導する側としては、課題を整理しながらも確かな手応えを感じた。

様々な障害のある子どもたちの音楽教育に関して、分かりやすく示された「音楽科指導内容指標」を開発された。個々の実態、個性が多様化する中で、実態把握、目標設定、具体的な活動内容の選定にこの指標が大いに活かされた。また、教科別の指導に大切な系統的な指導、段階的な指導という点では私達教師が貴重なテキストとして学び、専門性を深めることにもつながった。

②課題

さらなる音楽教育の充実を目指し、28年度も藤原先生の指導を継続していただくことが確約できた。子どもたちが音楽の楽しさを感じ、満足感、成就感を味わうことができるように、私達教師は藤原先生のご指導を受けながら、音楽の授業力を磨き、向上させることが喫緊の課題といえよう。また、熊大との遠距離は否めないが、学生と交流して音楽の楽しさを共有し、学校独自では味わえない音楽の素晴らしさを一人一人が感じてほしいと願う。

3. 大学からの報告

1) 授業づくりのサポート

特別支援学校（知的障害教育）の音楽科授業は、音楽科免許状を有さない先生が主担当となり、チームティーチングで行われるケースも多い。このような中、学習指導要領に概括的に示された特別支援学校（知的障害教育）音楽科の目標や内容を読み取り、担当児童生徒の指導目標や内容を設定するという作業は、先生方にとって大きな負担となっている。

荒尾支援学校小学部一般学級でも、音楽科免許状を有する先生が不在の中、児童の実態に即したグルーピングや楽器の選定に課題を抱えられているようであった。そこで筆者は、開発中の「特別支援学校（知的障害教育）音楽科指導内容指標案」（藤原・福島、2015）を活用いただき、先生方と共に授業づくりを行うことを考えた。この指標は、先生方が児童生徒の指導目標や指導内容を設定する際に、音楽的発達との関連や学習指導要領上の位置づけを捉えやすいように作成している。器楽版では、使用楽器の例も掲載している。

また、学校にある楽器の種類が少なく、器楽活動の展開が制限されてしまうという現状も伺った。そこで、研究室にある楽器の中から使用楽器を選び、器楽活動の幅を広げていただきたと考えた。

さらに、発表会に向けた取り組みにおいて、先生方は児童の演奏支援に携わることになり、合奏や合唱に厚みを加える役割を担うことは難しいと予想された。そこで、研究室の音楽が得意な学生が、学びながら、演奏に厚みを増すお手伝いをさせていただくことを考えた。

2) 合同演奏の構想

筆者は、児童と学生の合同演奏が、児童にとっては「通常の授業では経験できない音楽活動を提供する機会」になり、学生にとっては「児童と共に音楽を楽しむ方法を考える機会」になるように構想した。

①「ドレミのうた」

「ドレミのうた」では、児童と学生が各パートに分かれて演奏し、学生は4番目のパートを担当することになっていた。筆者が、「今回の合奏で児童が使用しない楽器や児童が普段触れることの少ない楽器を使用すること」、「児童に音階に興味を持ってもらえるような演奏にすること」を提案したところ、学生は以下のような演奏の構成を考えた。その後、荒尾支援学校からの依頼を受け、学生は、全体をとおして歌（10名）とピアノ伴奏（1名）も担当することになった。

- ・学生パート（4番）の前奏部分で1名が笛を吹き、学生の発表場面を知らせる。
- ・「どんなときにも、れつをくんで、みんな楽しく、ファイトをもって…」と歌詞の内容を振り付けで表現して歌いながら、上記歌詞の下線の部分で該当する音のクワイヤーホーンを「ド、レ、ミ、ファ…」と吹く。クワイヤーホーンは「ド」から「シ」の7本を用意し、学生7名それぞれが担当する。
- ・旋律をフルート2本で演奏する。
- ・学生パートの最後に、学生全員で「レッツゴー！」の掛け声を入れ、児童と学生の合同パート（5番）への場面転換を促す。



写真9 「ドレミのうた」学生パートの演奏の様子

②「にじ」

「にじ」では、学生が児童と一緒に振り付けをしながら歌うことになっていた。筆者が「児童が自身の歌（主旋律）に集中できるように配慮しながら、児童だけでは経験する機会の少ない歌唱形態を取り入れること」を提案したところ、学生は以下のような演奏の構成を考えた。

- ・児童の歌とは全く異なる歌を入れた二重唱の方が児童は自身の歌（主旋律）に集中できるのではないかと考え、主旋律とは異なる歌詞で異なる音の動きをする副旋律を、児童とは離れた場所で大学生が歌う。具体的には、児童が「にじがにじが空にかかって…」と主旋律を歌うのに合わせて、学生が「ラーラーラー」と一度ずつ音程が下降していく副旋律を歌う。学生は全体の音量のバランスを考えて、主旋律担当と副旋律担当に分かれる。主旋律担当の5名は、児童の中に入って児童と共に身体表現をしながら歌い、副旋律担当の6名は児童集団の後ろで歌う。
- ・間奏の場面で、全員でウェーブをして虹をつくる演出を加える。1名の学生が児童の前を歩き、

児童にはその学生が自分の前にきたら「バンザイ」をするように伝える。ウェーブの流れと共に、スクリーンに少しずつ虹が登場し、ウェーブが終わったところで虹が完成するスライドを用意する。



写真10 「にじ」間奏の演出

3) 合同演奏の発表に向けた取り組み

①合同練習

合同演奏後のアンケート（回答者：合同練習参加学生11名）では、児童との合同演奏について以下のような感想が寄せられた。学生が意図した合同演奏はおおむね実現したようであったが、「にじ」については、初めて出会った児童との身体表現に難しさを感じた様子であった。

- ・パートが違ってても、1つの音楽に合わせることで一体感が生まれていて、参加していてとても楽しかったです。（ドレミのうた）
- ・フルートを持っていると興味しんしんで近づいてきてくれる子もいて、少し話すこともできました。（ドレミのうた）
- ・「にじ」で急に大学生がハモリで入ったら、子どもたちは少し気になるかなと心配でしたが、自分のパートをちゃんと歌えていたので安心しました。（にじ）
- ・介入の仕方や程度が難しかった。一番端の子が一人で踊っていたので、その横に付いてあげた方がよかったかなと思った。（にじ）

また、音楽科授業の手立てに関する感想も寄せられた。学生は、荒尾支援学校の先生方が考えられた「児童の実態に応じたグルーピングや演奏の構成、楽譜の工夫」³⁾を捉えることができていた。

- ・子どもの実態に応じて「打楽器グループ」「卓上ベルグループ」「身体表現グループ」に分けており、その子の持てる力を十分に発揮させている

と思った。子どもも自分の役割を十分に理解してやっていたからこそ、クオリティーの高い演奏になっていたのだと思う。(ドレミのうた)

- ・卓上ベル、太鼓等、ダンスと、全てのパートの児童が目立つところがきちんとあって、子どもたちも楽しそうにしているよかったです。(ドレミのうた)
- ・1人1人自分専用の分かりやすく色を塗ってある楽譜があったり、先生が前や横、後ろでリズムをとったりして、子どもたちが楽しく演奏している様子が見られた。(ドレミのうた)

さらに、児童との交流については、以下のような感想が寄せられた。短時間の交流ではあったが、学生は、児童の様子を知ることができ、児童との合同演奏の発表に向けて気持ちを高めた様子であった。交流の方法についても省察している。

- ・子どもたちがバスから移動する様子や、ご飯を食べる様子から、色々なことがわかり、先生方の触れ合う様子を見てとても勉強をさせていただきました。
- ・昼食の時は6年生のクラスのテーブルで一緒に食べました。子ども達と音楽の時間のことや弁当、給食のことなど、たくさん話すことができました。
- ・「今度、荒尾に来てください」「また会いたいです」と子どもたちが言ってくれて、とても温かい気持ちになりました。本番のコンサートが楽しみです。
- ・私たちが何か手遊びのようなものを用意して、交流の初めに触れあう時間がとれれば、もっと子どもたちが安心して取り組めたかもしれないと感じました。

②スクールコンサート

スクールコンサート後のアンケート(回答者:スクールコンサート参加学生14名)では、児童との合同演奏について以下のような感想が寄せられた。合同練習の成果もあり、児童との合同演奏を楽しめた様子がうかがえる。「にじ」での児童との関わりについては、合同練習後の反省から、先生方に学生の担当児童を決めていただいた。しかし、身体表現の関わりは、1回の交流では難しさが残ったようである。

- ・とても楽しくドレミの歌を一緒に演奏することができた。私たちがメインで歌った4番では、後ろを見て一緒に歌っている子がいて嬉しかっ

た。(ドレミのうた)

- ・虹では、1回大学で合同練習をしたせいもあるか、歌唱中、大学生の方を向いて笑顔を見せたり、自分から手を取ってつないでくれたりと、練習時よりもより近く生徒を感じることができたかなと思う。(にじ)
- ・にじの時、私は低学年の子の隣にいたが、なかなか関わり方が難しく、どのように接して良いのか分からないときがあった。(にじ)

また、今後については、以下のような感想が寄せられた。学生は特別支援学校の児童生徒の交流の機会を望んでおり、次の機会には、交流の回数を増やし、コンサート会場の下見を行って、合同演奏の質を高めたいと考えているようであった。

- ・今後このように、附特以外の支援学校の子どもたちとの交流の機会もあるとうれしいと思った。
- ・距離が荒尾支援学校と熊大では離れているので仕方ないかもしれないが、次する時は交流をもう少し入れるともっと関わり合えるし、楽しめるなど感じた。
- ・もし来年も、参加させて頂けるのであれば、次は、できれば参加者(大学生)全員で下見に行って、配置や段取り等の共通理解をはかれたらと思います。

さらに、コンサート全体については、以下のような感想が寄せられた。児童生徒と一緒に作り上げる形式のコンサートが、共に音楽を楽しむ方法を考える機会になったようである。また、小学部以外の演目からも、児童生徒の音楽表現の可能性の大きさを感じ、音楽による支援への関心を高めた様子がうかがえた。

- ・去年は、子どもたちに魅せるという形だったが、今年は、子どもたちと一緒に作りあげる形だったのでとてもよかった。
- ・子どもたちにどのように感じてもらいたいのか、どのように見せたらわかりやすいか、また全員が楽しむためにはどうしたら良いかということを考え、とても勉強になりました。
- ・重複学級の児童生徒さんとはKAGURAの際に初めて関わったが、短い時間で様々な表情を近くで見ることができた。普段は関わることの少ない重複学級の児童生徒さんへの音楽による支援も今後やってみたいと思った。
- ・ビデオでも見ていましたが、中学部さんの合唱

はさらにうまくなっていて、すごいなと思った。ただ歌う、声を出すというだけではなくて、ハーモニーになっていたり、風になりたいの演奏でもあったが、自分のタイミングを待つ、相手を聴く、という場面があって、教科として音楽が予想以上にできるんだと思った。どのような指導をこれまで行ってきたのか、知りたいと思いました。

4) 取り組みの成果と課題

筆者は、先生方と授業づくりの機会をいただき、授業の中で児童の表現力がどのように培われていくのか、また、先生方がそのためにどのような工夫をされ、どのようなことを課題と感じられるのか、その過程を詳しく学ぶことができた。この授業づくりが、先生方の支援する児童と筆者の指導する学生による合同演奏の発表をめざした取り組みであったことが、相互の意見交換を円滑にし、学びを深化させた要因の一つであると考えます。

今後は、授業づくりの中でご協力いただいたアンケートの分析を進め、特別支援学校において個々のニーズに即した音楽科指導を支えることができるような指導内容指標の開発を進めていきたい。

また、この取り組みにおいて、学生は貴重な経験と学びの機会をいただいた。自分たちが考えた演奏や企画で特別支援学校の児童生徒と交流し、共に楽しむことができた経験は、教員をめざす学生にとって大きな財産になるであろう。また、合同練習やコンサートをとおして、児童生徒の音楽表現の可能性を感じ、音楽表現を促す手立てを知ったことは、これから音楽による支援を考える際の原動力になるであろう。

今後は、児童との交流の機会を工夫し、学生がさらに学びを深められるような取り組みを考えていきたい。

おわりに

平成28年度も、荒尾支援学校小学部一般学級児童と大学生による合同演奏の発表を中心とした音楽科

の授業づくりを進めているところである。

本稿での検討結果を踏まえて、新たな共同実践の可能性を探りたいと考えている。

謝 辞

貴重な学びの機会をいただきました熊本県立ひのくに高等支援学校校長（平成27年度熊本県立荒尾支援学校校長）の中山龍也先生に心より感謝申し上げます。また、小学部一般学級の授業づくりやコンサートの実施にご協力いただきました荒尾支援学校の先生方に心より御礼申し上げます。

付記

本実践の一部は、JSPS科研費JP26381220の助成を受けて行ったものである。

注および引用

- 1) 藤原志帆・福島さやか(2015)『『特別支援学校(知的障害教育)音楽科指導内容指標』の開発』『日本教科教育学会全国大会論文集』, pp.226-227.
- 2) 荒尾支援学校では、「育てたい力」(「かかわる」「きめる」「はたらく」の3つ観点からなる)一覧表をもとに、題材の目標を設定している。「かかわる」とは、「あいさつを基本とし、様々な人と場を共有しやり取りをする。また、そう努力する力。」のことである。「きめる」とは、「言語・非言語にかかわらず自分でやりたいことを選択し、遂行する。また、そう努力する力。」を示す。「はたらく」とは、「事物や事象に働きかける。五感を働かせる。係から役割遂行、仕事へつなげる。また、そう努力する力。」のことである。この3つの観点(育てたい力)から児童生徒の可能性を引き出し、学校生活、家庭生活、地域生活に自ら参加できる力を育成し、小中高という一貫教育の中で、また、それぞれのライフステージにおいて必要な力を身に付けていく教育をキャリア教育と捉えている。
- 3) 藤森智美(2016)『『音楽科』における授業づくりの工夫』『平成27年度熊本県立荒尾支援学校実践データ集(CD-R版)』。